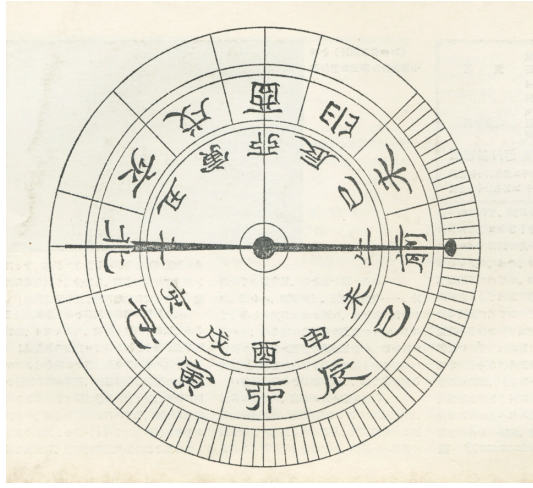


尾形亀之助読書会通信

第五号



「北日本詩人」大正15年4月号の表紙絵・尾形亀之助

をして音声データとして記録があります。録音がきれいに残っている村上様、五十殿様と金子様、それに佐々木様のお話は、文字データとして起こして、この通信でお伝えしたいと思っておりますが、なにぶん時間がなく、肉体も言うことをきかず、精神力が衰え、ついつい後回しとなっております。しかし、必ず実現はしなければと思っております。鉄は熱いうちに打てということで、今号は先日の第一三回の様子を中心に内容を編集させていただきました。便所の中や、電車の中などなにかのついでにお手にとつて御笑読いただければ幸いです。

「亀之助 in JAZZ」GIRU

二〇一四年一月二六日の第一三回尾形亀之助読書会で、私がジャズを通じてお伝えしたことをここで整理してみたいと思います。なにか漠然とした、何を言いたかったか解らないところが多々あったと思います。それは、基本的には、音楽を聴いて、皆様がそれぞれ自分なりに感じ取っていただければ良いのです。しかし、尾形亀之助との関係というところで、ちよつと文章として書き残したいと思ひ、急ぎ筆を取つた次第です。

一 前提

詩は言葉による創造行為です。ジャズは音による創造行為です。その姿形、匂いや響きは違いますが、詩とジャズは自己表現という同じ目的を持ったひとつの表現手段であります。そして、口語詩は、亀之助の活動時期においては、まだ新しい表現手段であり、かつ決まり事のない自由で制限のないものでした。また、ジャズは二世紀に発展した音楽形式で、特徴の一つが即興演奏という、これまた自由で制限のないものであります。重なりはしないにしても、互いの表現形式は、約百年の中で試行錯誤を繰り返して、現在の形を成してきたと言えます。

極端な言い方をすれば、制約のない中で自己表現を試みた場合、さて、人間はどのようなものを、書き、聴かせてくれるのか。その過程では、どんな思考が、心の内面の動きが、働いてきたのかということを考えてゆくと、ある必然に出会うこともあるのかなという興味が生まれてきました。

そこで、尾形亀之助という詩人を、言葉の解釈や印象で捉えるのではなく、全く違った表現形式で捉えてみる

ことで、何かこれまで見えないものが見えてくるのではないかと、ということが今回のテーマの核心でした。

二 喩え話

最初に考えたことが、尾形亀之助をジャズメンに例えたとしたら、誰になるかということでした。それは、チェット・ベイカーだろうなということが私の結論でした。

表現形式としては、詩は文字から構成される言葉を視覚で捉えた後、言葉を「読む」という認識作業が必要で、その後に、感じる（伝わる）ということになります。音楽は、認識という作業は必要ではなく、聴覚を通じて直接に、人が感じる（伝わる）ということになります。そして、その後に「いったいこの気持ちはなんだろうか」と時には認識する作業を行ったりします。言葉と音楽では、芸術表現としては、その伝わる過程に、そして認識する過程に違いがあると思います。尾形亀之助の詩は、どちらかと言えば、音楽に近い伝わり方をしていと思ひます。絵画も、感じ方（伝わり方）は音楽に近いと思ひます。ジャズは、音楽のジャンルの中でも独特なところがあつて、「今、どんなコードで演奏しているのか」、「今、何を演奏しているのか」という認識の作業をけっこう頻繁に行わなければならないのだと思ひます。認識されて初めて気づき、「今、こういうことをしているのか」と納得する場合は他の音楽と比べたら多いと思ひます。

それで、チェット・ベイカーです。彼は、楽譜が読めなかつたと言われています。でも、一度聴いただけでメロディーは完璧にトランペットで演奏することができたと言われています（伝記『終わりなき闇』（ジエイムズ・ギャビン著、鈴木玲子訳、河出書房新社、参照）。音を聞き分け、気持ちよいメロディーを感じ取り、表現するセンスが飛び抜けていたのです。技法、つまり理屈や方法論では決して演奏はしなかつた人です。それだけに、長いジャズメンとしての人生の中で、音楽的に進化はしていません。一生、自分を変えなかつたというか、変えることができなかったのだと思ひます。そして、一九五〇年代に出した『Sings!』、『Sings And Plays!』等は、ジャズ界に限らずアメリカの大衆的に受け入れられ、人気者となりました。それは、アメリカの第二次世界大戦での戦勝国としての誇りと産業の隆盛に沸き立

はじめに

久しぶりの尾形亀之助読書会通信をお届けいたします。この会、先日一月二六日に第一三回を開催させていただきました。三年目に突入いたしました。これも参加していただけた方々、それにゲストでお話をしていただいた方々がなければ成し遂げられなかつたことです。ただただ感謝申し上げる次第です。毎回、多彩なゲストの方にお越しいただき、特に、遠方からお越しいただいた吉田美和子様、五十殿利治先生には感謝してもしきれないことと思っております。また、年六回開催のうち、二回は「亀との句会」と称して句会を亀之助の菩提寺繁昌院で開催しておりますが、仕切りをしていただいている小熊座の渡辺誠一郎様には、毎回、俳句を詠む楽しさを教えていただき、ありがたいことの上なく、これまでまた感謝してもしきれません。その他にも小熊座の佐藤きみこ様、永野シンさんと、数えてゆけば沢山の方々に支えていただき、亀之助や父の余十さんの楽しき供養になっているものと、勝手に思っております。さつみ様に、見ず知らずの者の突然の願いを快く引き受けていただいた村上かみ様にお願ひし、お話ししていただいた佐々木洋一様と、思い起せば、感謝の念と嬉しさが溢れるばかりです。そして、いつも読書会を支えていただき、お話までしていただいた西田朋様、金子忠政様にも改めて感謝申し上げます。

これまでに開催した会で、お話ししていただいた内容は、幾つかは録音

つ、快適な時代の雰囲気を見事に捉えたものの一つだったからだと云えます。そして、若々しい青年が、女性のような中性の声を出して甘く歌う音楽【Chet Baker『You Don't Know What Love Is』(『Sings And Plays』)より】は、そのアンバランス故に、ある意味不気味でした。さらに、続いて死の直前の記録映画『DVD『Get, s It Lost』より Chet Baker『Imagination』を観ていただきました。ヒット作が全く出ずにヨーロッパを半ば放浪し、疲れ果てよぼよぼの廃人一步手前の表情で年老いたチェット・ベイカーが歌う姿と、その口から出てくる一九五〇年代の頃と全く変わらない、若々しくて、女性のような中性な声は、それこそとても不気味です。そこに、福田拓也氏の著作『尾形亀之助の詩 大正的「解体」から昭和的「無」へ』(思潮社)で触れられたフロイトの「不気味さ」で表した尾形亀之助の詩表現の解釈と通じるものを感じました。「感覚的な表現」「不変性」「アンバランス」「不気味さ」「違和感」といったものが、一番似合うのがチェット・ベイカーであると思った次第です。

三 自分を表現すること

このタイトルでの項目では、ジャズにおいて自己表現とは、自分の中のどんなことをよりどころとして表出するのかということを考えてみました。そこで、ジャズが持つ、社会(自分)への抵抗、喪失の表現、というその音楽的なルーツからくる特徴により導かれる傾向として、自分の中の「拘り」や「ひっかかり」、「違和感」を糧として表現することが一般的であるとして、ミッシェル・ペトルチアーニの曲【Michel Petrucciani『So What (Live in Tokyo)』より】を聴いていただきました。ミッシェル・ペトルチアーニは彼の自伝映画『情熱のピアノリズム』の中で「僕にはピアノが黒と白の歯で出来ているように思えた。ピアノを演奏したかったけど、まったく迷子になったような気分だった。大海原のただなかの、コンパスを持たないボートのようなんだ。僕には評価の基礎となるものが何もなく、進むべき道も

なかった。まるでピアノがくすくす笑いをして『さあ、弾けるなら弾いてごらんなさい!』と云っているかのように思えた。それを克服するには長い時間がかかったんだ。」と語っています。この自分に刃向かってくるむき出しの歯(鍵盤)を克服するという、抵抗感を糧とした表現行為がジャズの醍醐味の一つであると考えます。そこで、話はジャズの本道へは進まずに、脇道にずれてゆきます。尾形亀之助は、「抵抗感」を糧としない、「憧れ」とか「雰囲気」「気分」「なんとなく」といった、すり抜けてしまうような感覚的なものに自分を溶け込ませています。亀之助の詩は、その感覚をそのまま表現した、といえるものだと結論づけました。つまり、存在自体がもう作品になっっている。何を書いても、真の自己表現になっっているということです。それが、ジャズで言えば、チェット・ベイカーであり、またジャズの発展の過程で考えると、いわゆるクール・ジャズに行き着くということでした。「抵抗」の中にあり頑張っている、熱狂している、そのただ中においては、「なんとなく」というとらえどころのないようなものは、とてもクール(かっこよい)と感ずることがあります。単純に言うくと、尾形亀之助の詩は、そういうものだとお話ししました。

そして、表現とは年を経るに従い成熟するものです。その代表的な例として、初期のスタン・ゲッツの演奏【Stan Getz『It Don't Mean A Thing』(『Interpretations』)より】と死の間際に録音されたライブ盤の曲【Stan Getz『First Song』(『People Time』)より】をお聴きいただきました。それは、成熟しなかった(しようとしなかった)亀之助の精神、チェット・ベイカーの生涯との対比を試みたものです。逆に言えば、チェット・ベイカーの若い頃と年老いた頃の演奏を観て聴いた後に、スタン・ゲッツの成熟を聴けば、自然に違いが解るといふことです。亀之助の作品を北川冬彦が「童心」と評価したことは、当を得ていると言わざるを得ないと思えます。そして、同じジャンキー(麻薬中毒)だった二人の決定的な違いは、楽器を奏でる技法・理論を持つ

ていたか否かということです。技法や理論を持っていけば、発展できます。しかし、積み木で考えれば、順序立てて整理して積み重ねなければ、山は小さいです。そして、山は直ぐに崩れてしまいます。それが尾形亀之助です。

四 クール(冷めた表現)

前項の文章の中で、抵抗が充滿している状況で「なんとなく」というとらえどころない感覚は、時に「クール(かっこいい)」と書きました。熱狂の中で冷めた目を持つことのかっこよさです。ジャズにおいても、黒人中心のハードバップ全盛の中、冷めた音を追い求めたジャズメンがいました。それが、レニー・トリスターノであり、リー・コンイツ(他に、ウォーン・マーシュなど)でした。とらうことで、彼らの曲【Lenny Trisano『You Don't Know What Love Is』(『The New Trisano』)】Lee Konitz『All Of Me』(『Motion』)より】をそれぞれお聴きいただきました。「高揚感のない表現」「メロディー(情感)のない表現」「刺激のない表現」です。音と音の間に強弱を付けない表現です。尾形亀之助の詩の特徴で言えば、吉田美和子さんが書かれている、「モノに優劣をつけない」ということです。

そもそもジャズにおいてクールな表現は、もつと以前から行われていたということで、レスター・ヤングの演奏が入った曲【Lester Young『All Of Me』(『Press And Teddy』)より】を聴いていただきました。このことは、なんとなくでも、お越しいただいた方に感じていただけたら、嬉しいです。

こういった抑揚のない表現は、いったいどこから生じたのか。「熱狂」や「抵抗」があつて初めて成り立つ、いわば影の部分であり、なにもない中での自己表現の方法としてそもそも成り立つのか、ということなのですが、それを考える手がかりとして、ビリー・ホリデイが唄う曲【Billie Holiday『On The Sunny Side Of The Street』(『Strange Fruit』)より】をお聴きいただきました。彼女は、決して唄は上手ではありません。でも、味わい深い唄です。表現

は、さりげないです。自分を飾らないのです。も、今でも最高のジャズシンガーであると思っています。唄がへたくそでも、その唄の表現は魅力的で五〇年以上経った今でも色あせていない、ということです。それは、自分を見事に唄で表現したからなのだと思います。自分を表現するのに、何も、ジェスチャーを大きくすれば良い、最高の笑顔をつくれれば良い、声を高めれば良い、人ができない技を会得すればよい、ということでは全くないということです。私は、ジャズの世界で言われる「サククス演奏の革新を行ったレスター・ヤングのフレーズは、ピリー・ホリディの唄い方をまねたものだ。」というのは、真実に近いと思っています。ついでに、自分を表現することの比較でピリー・ホリディのような歌声で人気を得たマデリン・ペルーの曲【Madelaine Peyrux「Bare Bones」(「Bare Bones」より)】を聴いていただきました。

五 無意味な意味

ジャズの特徴の一つアドリブ、つまり即興演奏の考え方を極端に進めると、コードもリズムもメロディーも自由な演奏という考え方が出てきます。それを最初に実践した人の一人がオーネット・コールマンです。この読書会の最後に代表作から一曲【Ornet Colman「Antiges」(「At The Golden Circle Stockholm Vol.2」より)】を聴いていただきました。この代表作といわれる『「At The Golden Circle Stockholm」』は、ジャズのレコードの名門レーベルであるブルーノートから出ています。つまり、ジャズ界においては、認められた表現方法です。それは、単なるでたためではないということです。最初にオーネット・コールマンの演奏を聴いたアメリカ人の印象は、「ブルースみたい」「ゴスペルみたい」というものでした。フリージャズの演奏の中から、同じような固有の色を聴衆は感じ取ったのでした。そのことは、オーネット・コールマンのちよつと聴くとでたためにただ吹いている誰にでもできるような演奏と違ってしまふのですが、実はオーネット・

コールマンにしかできない表現だったということ。演奏内容は、リズムはありますが、全く意味づけのない音の連続です。そこに意味を見出そうとしても、己自身の猥雑で気分が左右される自画像をみるばかりになります。それはそれで良いとも言えますが、でもオーネット・コールマンの演奏を聴いているうちになにか得体の知れない快感のような恍惚を感じるようになります。それは、空虚感ということに近いかもしれません。福田拓也氏が書かれている「ラカンの袋小路」ではないかと勝手に私は思っています。そして、多分、その瞬間、オーネット・コールマンという一人の人間という存在に触れているのだと思います。他人に自分の核心に触れたような気にさせる演奏をすることは、凄いいことです。それは、意味のない音の羅列の中に意味があると言うことです。詩で考えてみれば、いわゆる詩的表現がないのです。普段使うなんでもない言葉で詩を表現するということも違います。要は、書く必要のない言葉で書くということだと思いました。「敢えて」でもありません。それは「なんとなく」とか「飾りっ気なく」とか「淡々と」とかを、全く通り抜けた言葉です。底なしのクールです。

六 最後に

冒頭、「お耳慣らし」ということで、マグナス・ヨーストの曲【Magus Hjorth「In Memorandum - Remembering Tohoku」(「Blue Interval」より)】を聴いていただきました。この曲は、読書会でお話したようにマグナス・ヨーストが東日本大震災で犠牲になられた方々に捧げたレクイエムです。とても美しい曲です。こういう情感溢れる演奏には、すばらしさと危うさが同居しています。つまり、感情が動かされるのです。それは、心の中でいわゆる感動と言われることが起きるということです。そういう中で自分が自分であることは、なかなか難しいことです。ややもすると、みんな「良かったね」「こうでなきゃいけないね」ということになります。尾形亀之助は、徹底的にそういうことにそっぽを向い

ていた詩人でした。関東大震災を体験し、世の中が悲しみに溢れていたとき、被災地のまったただ中で、尾形亀之助は自分が自分であることをけつして手放さなかったのです。世の中の雰囲気は尋常でなかったとき、自分を自分であるために支えるには、『障子のある家』のような書く必要がなかったことを書くという自己確認の作業が唯一の彼のやれることだったのでないでしょうか。見事な自己表現としての詩表現です。

最後に、今、語り終えて思っていることは、「ステレオタイプな内容に終始した」という後悔です。語りつくされてきた尾形亀之助のポートレートは浮き上がった来なかつたということです。

あとがき

今後の予定を書かせていただきます。次回三月は、神奈川にお住まいの詩人長尾高弘氏にお越しいただきお話をさせていただきたいと考えています。具体的なテーマはまだ決まっておりません。日時とテーマが決まりましたら、チラシをまきたいと思っています。その他、詩誌回生のホームページで御案内いたします。また、メールアドレスをお持ちの方は、メールで御連絡を差し上げたいと思っております。連絡を受けてもいいと思われる方がいられたら詩誌回生のメールアドレス(Kaisei@poetic.jp)に連絡をいただければ嬉しいですよ。

その後は、六月一日(五月開催分として)に年二回開催の「亀どの句会」を繁昌院で行う予定であります。参加されたい方は、御予定を入れていただければと思います。また、七月はいつもお越しいただいているやまうちあつしさんにお話をさせていただくこととなりました。そして、九月は同じく瀬尾雅弘さんにフランス語に関わることで何かを話していただくこととしております。気仙沼の千田さんは、その後、お仕事が落ち着いたらお越しいただこうと思っております。他に、ジャズシリーズとして「オーレルナイトジャズ」など、色々と考えてゆきたいと思っております。どうか、よろしく願います。

一〇一四年一月二八日発行(編集・小熊昭広)

宮城県大河原町大谷字原前五〇の五

090-5230-2349

kaisei@poetic.jp